

## 月の花挽歌 ～12. 末摘花～

12-5

とてもお洒落な空間だなあと感じ入っている真紀に、間接照明で適度に照らされた9席あるカウンターの左端に座っている男のお客が振り向いた。

「こちらにいらっしゃい」とカウンター内の彩は言って、真紀が来ることを見通していたように、ごく自然に男の隣の席を勧めた。

他にお客はいなかったので、真紀は余計な気遣いをすることもなく、丁寧な挨拶をして腰掛けた。

「こちらは山形大学の先生。真紀ちゃんの話は、ざっと話しておきましたからね」

あけすけに言う彩は、アイラモルトウイスキーのボウモア17年をモルトグラスで飲んでいる隣客を、山形大学人文社会科学部のS教授で専門領域はアメリカ文学だと真紀に紹介した。

彩がノンアルコールカクテルのシャリーテンプルを作ってくれたが、その頃の真紀にしてみれば、S教授の前にあるボトルが何であるのか知る由もなく、カクテルもなおさらであったが、短兵急にS教授を引き合わせた彩の意図だけは直ぐに理解した。

「アメリカ文学に造詣が深いということですが……」と素っ気なく訊く中年男性に、真紀は教授と言われてみればそうかな程度度の第一印象しか持てなかったが、それでも彩の人間力を疑わなかったため、気持ちは意味もなく高揚していた。

「道半ばですが、大好きです」と真紀は相手の目を直視しながら返答した。そして次からの話の展開を、お預けを食う犬のような面持ちで待っていた。

見事な梁組にセッティングされたスピーカーからジョージ・ガーシュインのピアノ曲が小さな音で流れていた。

真紀の本気度が伝わったのか、教授はチェイサーを三口飲むと、おもむろに、「今まで読んだ中で好きな作品は？」と訊いてきた。

「『キャッチャー・イン・ザ・ライ』です」と真紀は即座に答えた。

頷いたS教授は、彩に納得顔を見せると、シングルモルトウイスキーを愛おしむように口に含んだ。

「当然、フィッツジェラルドやヘミングウェイも何作か読んでいるだろうから、サリンジャーを一番に選んだのは、いいセンスをしていると思いますよ。で、レイモンド・チャンドラーは読みました？」とS教授は人柄からくるのだろう、真紀と同じ目線に立って言うしてくれる。

「いいえ。まだそこまでの余裕は……」

「手始めに『かわいい女』が良いかな。ミステリー作品の清水俊二氏と文学作品の野崎孝氏の翻訳を比べてみるのも一興です」とS教授は上機嫌で言った。

S教授と出会ったことが、真紀の人生の大きな転換点となった。その一つに慶応義塾大学文学部英米文学専攻を選択したことが挙げられる。

S教授は真紀に山形大学や東北大学を勧めなかった。